

自己評価報告書

平成23年 5月 1日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520659

研究課題名(和文) 日本古代施釉陶器生産における畿内と東海の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of *Kinai* and *Tokai* in the Production of Japanese Ancient Glazed Pottery

研究代表者

高橋 照彦 (TAKAHASHI TERUHIKO)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10249906

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：窯業、緑釉陶器、須恵器、測色、胎土分析、磁器、金属器、丹波篠窯

1. 研究計画の概要

(1) 正倉院宝物の三彩陶器に代表される施釉陶器は、飛鳥・奈良時代に海外の高度な技術を導入して自国での製作が行われた手工業生産物のうち、考古学的に実態を追及する数少ない存在である。本研究は、このような施釉陶器の生産のうち、主に平安時代における展開状況に焦点を当てる。

(2) 施釉陶器の大生産地は畿内(平安京近郊)と東海地域であるが、既往の研究においてはその相互比較の視点が不十分であることから、その両地域を中心に据えた研究を企図する。

(3) 畿内(平安京近郊)窯のうち丹波の篠窯は、東海地域とは異なる生産技術を持つとみなされていたが、9世紀末頃に操業された大谷3号窯では、東海と類似した技術や形態を持つ緑釉陶器を生産している実態が浮かび上がったことから、とりわけその包括的な検討を本研究の中心的な目標とする。

(4) 以上の方向性をふまえ、筆者の試案による器種分類を適用しつつ個体数を算出することや、器種による法量を計測することなど、考古学的な資料の再点検を通じて、畿内と東海の生産実態を明らかにする。

(5) また、古代施釉陶器の研究としては、これまで釉調などの色調が着目されていたが、感覚的な色彩表記が多かった。そのため、施釉陶器の色調の包括的検討として、分光測色計による測定、ならびに目視による標準色票との比較同定の双方を新たに行い、それらに基づく研究方法の構築を試みる。

(6) 上記の他にも、新たに釉や胎土に関する化学分析データなどの蓄積を行い、それらの多角的な比較・検討によって、畿内と東海の各生産地の地域的特質と相互関係を究明

する。

(7) さらには、施釉陶器以外の手工業生産などとの比較を通じて、施釉陶器生産の実態と歴史的位置の解明を目指す。

2. 研究の進捗状況

(1) 生産窯関連資料の考古学的な整理・検討としては、大谷3号窯出土品など、京都の篠窯を重点的に進めた。

① 畿内の緑釉陶器生産では、東海窯と類似した緑釉陶器が生産されることもあったが、検討の結果、猿投窯黒笹地区製品との相違の一方で、その他の東海諸窯との類似が指摘できる場合や、金属器そのものの模倣が想定される場合などのあることが導かれた。

② 大谷3号窯の緑釉陶器の碗を分析すると、輪状と蛇の目という高台形態の差違が、法量の大小や素地の色調の硬軟に対応していることを新たに確認できた。これは、金属器と青磁という模倣対象の差違に対応するものと推測され、『延喜式』にみえる「瓷器」(緑釉陶器)のように、器種の作り分けを踏襲するものと評価できた。

③ この他、個体数計測データにより生産窯の変遷と失敗品の廃棄過程を解明できることや、製作時の特徴的な手法によって陶工の個人識別が可能になりうることなど、方法論的にも興味深い事実も明らかになっている。

(2) 今回の研究における一つの柱である色調の測定・検討を行った。

① 客観化のために色票による同定と分光測色計による測定を進め、後者がより暗く判定される点など、今後の色調判定についての留意点が明らかとなった。

② 測色によって、産地や時期による色調の変化を客観化することができ、1つの産地での

ばらつきの特徴や、釉調や胎土との相関なども検討できた。

(3) 胎土や釉に関する化学分析などを行い、その結果についても再検討を行った。

①東海や畿内の洛北あるいは篠の初期の窯は、緑釉陶器と須恵器などで胎土の選別を行っていたが、洛西や篠の一般的な窯ではその選別がなされていないことが明確になった。洛西や篠では、大量生産による製品そのものの粗雑化が、選土段階での労力の軽減化を伴っていることなどを推測できた。

②釉についても新たに分析を行い、釉調と釉の化学組成との関係などの知見も得た。

(4) より広く歴史的な位置を考えるために、施釉陶器生産に限らない各種手工業生産についての専門の研究者と、合同の研究会を開催するなど、基礎情報の蓄積や検討も行った。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

本研究で重点的に取り組んでいる篠窯などの多角的な検討を通して、従来にない知見を得ることができた。特に、細部要素の分析や諸要素の相関が十分に検討されてこなかった緑釉陶器の研究に新たな方向性が生まれたものと考えており、それらは他の分析にも活用できる視点と言える。また、今回の研究で力点を置いた、測色による分析や理化学的な分析などの視角からも、基礎的な情報や新たな成果を得ることができた。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 篠窯に関する調査整理の成果を刊行物にまとめる。

(2) 篠窯以外の地域における生産窯出土遺物の検討などをさらに進める。

(3) 上記を総合化しつつ、古代から中世への手工業生産の推移における歴史的意味付けをより明確化できるように努めたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①中久保辰夫「篠窯跡群大谷3号窯出土供膳器の性格と史的意義」『太邇波考古』第31号、両丹考古学研究会、1～13頁、2010年、査読なし

②高橋照彦・長尾正義「三沢市平畑(1)遺跡から出土した緑釉陶器について」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第15号、35～47頁、2010年3月、査読なし

③高橋照彦「律令期葬制の成立過程」『日本史研究』559号、1～23頁、2009年3月、査読なし

[学会発表] (計7件)

①中久保辰夫「緑釉陶器の製品管理—篠窯跡群大谷3号窯出土資料を対象として—」、大阪歴史学会考古部会6月例会、2010年6月11日、阿倍野市民学習センター

②森 暢朗・田中由理・中久保辰夫・高橋 照彦「京都府篠大谷3号窯の調査と整理作業の成果」考古学研究会関西例会(164回)、2010年5月29日、大阪市港区民センター

③中久保辰夫・高橋照彦「緑釉陶器の系譜と規格性—京都府亀岡市篠窯跡群大谷3号窯の出土資料を中心に—」日本考古学協会大会、2010年5月23日、国土舘大学

④高橋照彦「考古資料からみた律令社会の成立過程とその変容」日本史研究会大会、2008年10月11日、花園大学

⑤高橋照彦「銭貨と土器からみた仁明朝」『仁明朝史研究会』第5回研究会、2008年9月15日、同志社女子大学

[図書] (計6件)

①高橋照彦ほか(共著)『仁明朝史の研究—承和転換期とその周辺—』財団法人古代学協会編、思文閣出版、2011年、141～188頁

②高橋照彦ほか(共著)『天平びとの華と祈り—謎の神雄寺—』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編、柳原出版、2010年、220～244頁

③高橋照彦ほか(共著)『Jr.日本の歴史』①、小学館、2010年、137～292頁

④高橋照彦ほか(共著)『京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料』京丹後市、2010年、12～13・216～217頁

⑤高橋照彦ほか(共著)『宴の中世一場・かわらけ・権力—』高志書院、2008年、35～68頁